

マンダラ文化論と教育

庄司和晃

1999.5.7
金沢研例会にて
(1999.3.16~)

2012.12.1
再提出

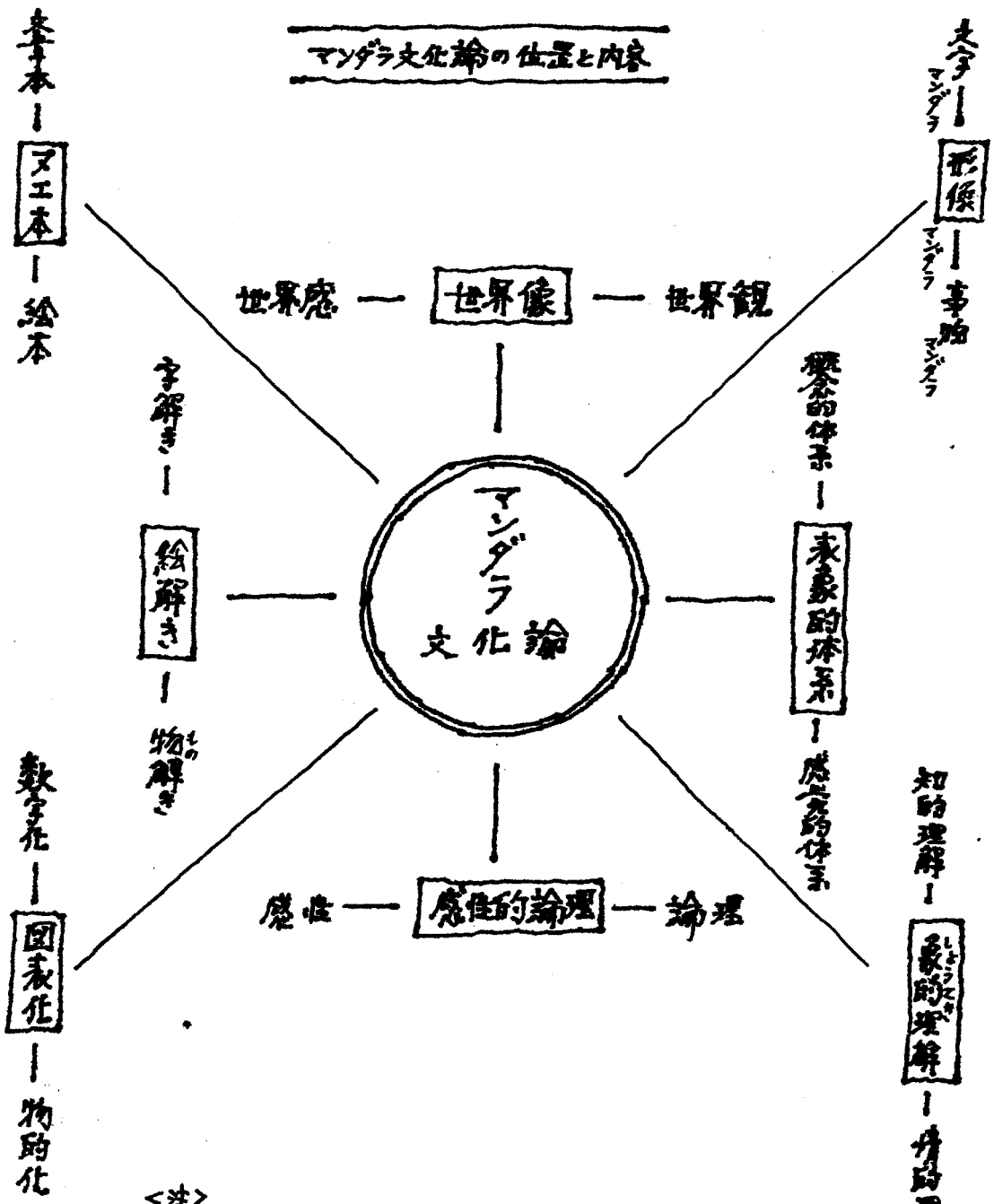
① 手広く掘り上げたい：「すべてがマンダラ館のだし」

② 体系づくりの意義をまきみとりたい：「とくにマエ的相親の示す功徳」

(目録の例の典型として)

- なぜ、「文化論と教育」か
- 「マンダラ文化論」の位置づけ
- 全体的なありようを示すもの
- マンダラという遺産の特異性
- マンダラの本質と特徴
- マンダラ表現方法の見方と示唆するもの
- マンダラ文化の三段階
(一般的・日常的・神秘的)
- マンダラ文化の世界
- 各種マンダラの分析的読み取り
(参考書「曼荼羅の四派論」とか)
- 教育実践論への足踏み
(世界のわしづかみと方法論とか)

マンダラ文化論の位置と内容



<注>

- 地図論も、シンボル論も。そして、親法論(親命・親ムツメ)も、がある。
- 象的理解(イメージ・オビエクト・カタドリ)によるアナルゴト
- 図表化(グラフ、字表とか)、物的化(如はCさ、石、神、神、神、神、神、神)
- 事物マンダラ(立体化・物的化、そして目覚め)
- ヒンドー教のヤムラ、チベット仏教の砂マンダラや「秘密集」も。
- さらに、ユング式マンダラも。

□ なぜ、「文化論と教育」か

題目の一部に、「文化論と教育」という言葉を使っています。

これは、意味あることとして、とくに表だてていひのぞす。

(1) どれの竟見図すること

① 学校教育や生涯学習のための、新面の「文化」を竟見し、究極しようとしていふこと。

② 全面教育学の一環としての実践化と、理論的位置づけをはかろうとしていふこと。

③ すなわち、文化論だけをやろうとしていふのではなくて、学習学的アプローチ、ないしは教育学的接近を第一義におかしていふこと。

(2) その方法論上のこと

① 一つの習俗、一つの事象のみを焦点をあてて、深くほりさげることではない。

② そういふ個別や特殊を、かたりに踏まえはするが、さきのリネエで、普通の範囲や領域へ目を移っていくこと。

③ つまり、「それと似たことは他にないか」という視点でもって、類似現象をどこかと取り上げること。科学の面でも宗教の面でも、似たことはたっぷりと、あたかも「みさも何も一緒」の主眼が、まずは振つていくということ。要するに、対象をひとつの所に、かたあすぎないということ。

さういふことです。

マンダラのこと、と言いますと、「マンダラ論」ではなくて、「マンダラ文化論」なのだ、ということなんです。

密教の、そのオリジナルの一事に、どっぴりと
ひたって、その謎解きへどこまでもはいつ
ていくということではないんです。

そのマンダラと類似したことは、他にもある
はずだ、キツとあるごとくという逆教で、ちよっ
とでも類似の事象は、どんどん掘り取って
集めて行きます。

そして、それらの全部を対象として、だきか
がえ、手広く「マンダラ文化論」として、その
究明と展開にあたっていくというわけです。

むろんのこと、「マンダラ」そのものか、なか
は、できるがギリ、キツちりとあさえはつも
りです。また、その特徴を精一杯に浮き立
たせてもいくつもりです。

他面から言いますと、密教のマンダラとい
うの一事は、「マンダラ文化論」の発端点。
突出点・暗示点として相対化し、その有

景にあるであろう何かを、一般的価値として
捉え、それを今後、新面の文化論・学習論・
教育論として役立てていくという願望です。
そのための、内容のポイントと道筋とを、あら
たに創造していきたいという事なのです。

右のようなことが、念頭にありたまた、単に
謎ときのこと・由来ばなしのこと・形見のこと、
というぐあいには言わずに、「謎とき文化論」と
教育し、「由来ばなし文化論」と教育し、「形見
文化論」と教育し、というような題名の形に
して、押し出しているわけです。

三 私的解釈のマンダラ観

密教風のマンダラの理を、一応踏まえたと
して、私の中たわきあがってきた、広義のマンダ
ラ観を記していくことといたします。

つぎのは、マンダラに対する、私の受けとめ、
受領・解釈です。

「一言ごらうと、私的解釈のマンダラ観という
ことになりました。」

少しく、ふえんして申しますと、広義の場だ
立つ、マンダラ文化観であります。
すなわち、こんなふうになります。

(1) 特異性をもつ文化

マンダラは面白い遺産です。

宗教的遺産であるばかりでなく、認識論
的にも教育論的にも、見逃ししえない遺
産です。独自の文化そのものであるばかりか、
そこを起点として、見方考え方をぐっと
抜げてくれる妙なる文化なんです。

(2) 「宇宙」説

一つの「宇宙」をあらわしたものの、それが

広義のマンダラです。

宇宙というのを別に、「世界」とか「全体」
とが、どう言ってもよいのです。

(3) 「まとまり」説

マンダラとは「まとまり」です。

動の中の静、異常の中の常、それを暗示
しているんです。

いわゆる、まとまった形です。その姿です。
全的なありようです。

すなわち、いろいろなものが、整然として
いる姿です。全体的な状態であり、その
様子です。

別言しますと、あるべきものが、あるべきよ
うにある姿、それがマンダラだといふわけ
です。

(4) 「あらゆる」説

あらゆる、誤解されぬのをとおされず、ばか

でかく言いますと、あらゆるものがマンダラで
あり、そういう見方をしているらと思つて、
すべてはマンダラだ、という線路で、事例を
ごきよだけ蒐集していくつもりです。

いわゆる宇宙のありようも、人体のありよう
も、土地(風土)のそれも、学問のそれも、科学
のそれも、芸術のそれも、社会相も、生活相
も……

そういういとなみそのものが、マンダラなんです。
そこにはキツと、いろいろなもの、敷正然たる
姿が存するはずですよ。

それはつまり、マンダラのもとには現実の
生活にある……その「真実を基礎に置きつつ、
マンダラ文化論を展開する立場を私は、
と、まいるわけですよ。

(5) 「わじつがみ」説
マンダラは、「宇宙」をわじつがみするもの
です。その「宇宙」を、先程のようにな、「世界」

が「全体」とかた置きかえてもよいのです。
そしてそれを、絵や図や物によって捉える手
法なのです。さらには、その具象的成象も
もありません。

(6) 「見抜く」説

マンダラは、「親」の教育ごもあはんとす。
全体を見抜く、というところに存するから
です。つまり、世界観の教育に資するといわ
れます。これはただちに、人間観にも人生観
にも……かがわつていきます。

「像」(イメージ・絵画的・実・かたち)を踏ま
えこの掘り取りをかためてくれるからです。

(7) 「一体」説

マンダラは、全体化と、省略化と、表象化と、
この三者が、いわば一体的になったものです。
「全体化」とは、全体を一體のもとに収めてい
るといふことです。また、真理・真実を全
体的にありわす、というところでもあります。

「省略化」とは、要点のみで、うまく他を省くこと、また雲の絵で、必要でない部分をカクス、あのヤリかたです、たとえば。

この雲形の絵、なかなかありません、いつがら登場することになったのか、うまい手法的説明であつたわけです。

要するに、省略化とは、ある強調をはかりつつ、必要のみを打ち出すということです。

「表象化」とは、わかりやすく、イメージ的、絵画や像で、また箱庭式的表現することというわけです。

(8) 「志向」説

マンダラとは、全体や全面への志向を宿したものです。

(9) 「構想」説

マンダラというのは、さういふならば、人類の宇宙構

想なのです。須弥山須弥山のことはきり一割であり、これなどはまた、マンダラのおとになつてはいるのではないでしょうが。

(10) 「案内」説

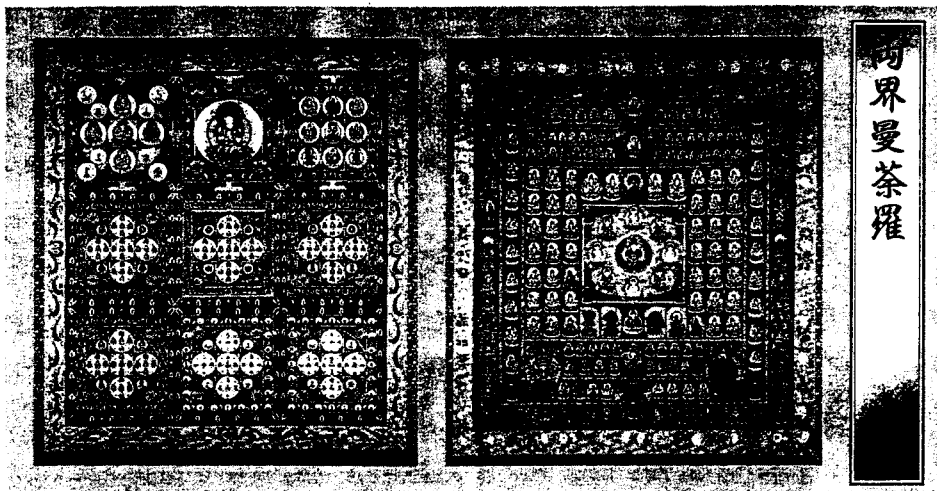
マンダラは、世界とわれとをつなぐもの。

すなわち、世界（全体・宇宙・悟り）と私とをつなぐ役割の「案内」役です。全体への道、宇宙（観）への道、悟りへの道、の、その道のことです。案内された道なんです。

ですから、「案内」と「お知り」と「道しるべ」に比することもできます。あるいは世界への「案内案内」なのです。（ここに修行もかかっています。）
神祕面がまろいまして、恥玉と俗とのかけは、いえるわけです。

三 マンダラ文化の具体相

そのごとく、数々のポイントを挙げていこう



阿界曼荼羅

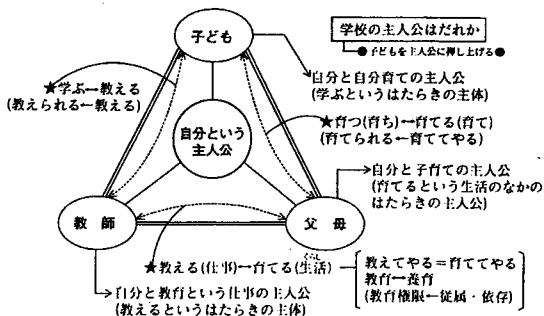
⑤

金剛界

胎藏界

(『蓮花蔵教タム入』1979.3.25 光文堂出版、表紙宗澤氏より、50万円、東京阿界曼荼羅の複製画)

言わねば、図解マンドラカ

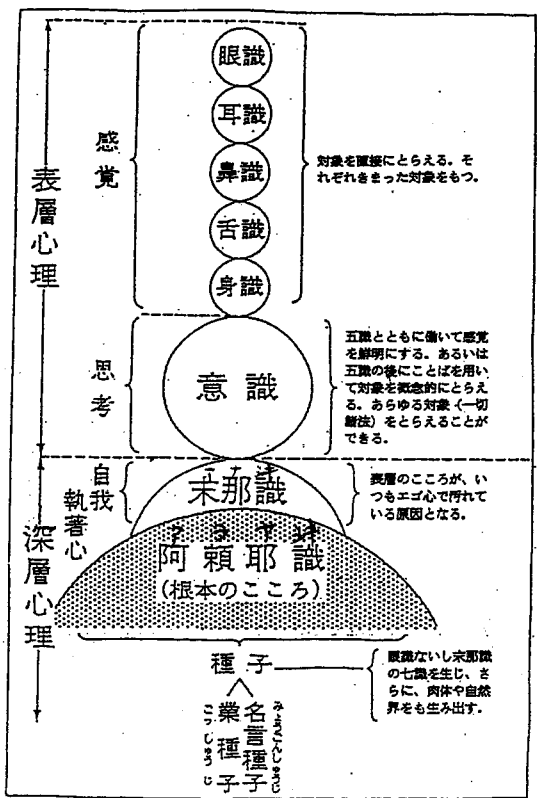


○子ども・父母・教師がともに、自分の主人公として活動し影響し合うなかで子どもを主人公として押し上げていくかわり。

⑦

図3 学校教育の主人公三相図

⑥ 「唯識思想が説く〈心の構造〉」

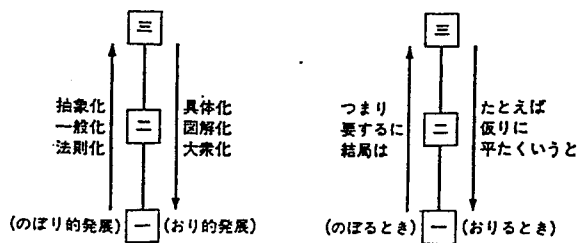


長谷川孝弘の「三相図」。
論文「教育を叩きつけた事例の思いと論理」。
『フォーラム 教育と文化』9号、P.43
1997.11.30 筑波教育センター。

→(ふしどしと変化の相のまとまりを暗示する。)

《認識ののほりおり》

《キッカケ言葉の例》

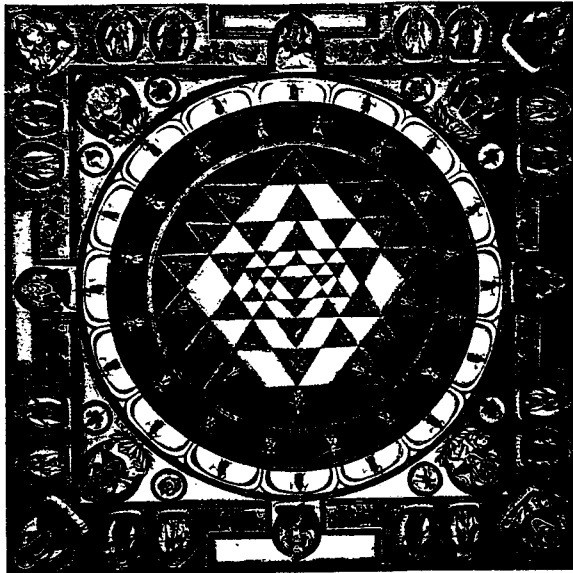


三段階説の展開

↑
横山弘一さんの図解。
『宗教学の物語』(1979)。
(『中野の雑誌』1992.9.10)
●『横山弘一著『唯識思想入門』』1976.10 三一文芸社(ゲルズ文庫)
●『唯識説 四世紀インド(孫鞠一兼著一世紀観)』みくろびくせん
●『東洋的知識論の一成果。』

解脱への視覚装置

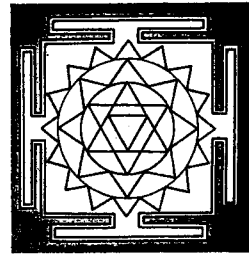
『ヒンドゥー教の本』
1995. 5. 1
学習研究社
右p.80 右p.130



①

サシュリー・ヤントラ(17c)。最も代表的なヤントラで、中央の点(点)をエネルギーの起点として、(女性原理=シャクティ)を覆す下向きの3つの三角形と(男性原理=シヴァ)を覆す上向きの4つの三角形が互いに貫入しながら創造的な展開を見せている。こうして暗示された世界の姿は外側の蓮華輪によって装束される。

わけです。そのしだいは、あとで「マンドラ文化とは何か」の項でまとめあげることとし、先に、具體相を見ておくこととしました。②

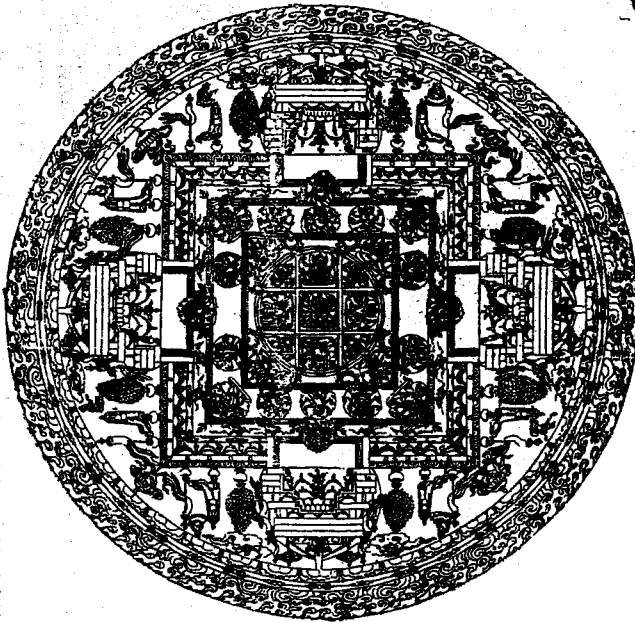


バウラーキー女神のヤントラ。ローギ・ギーナンダ(ヤントラ)の力。以上、阿闍梨=立川宗

②

③

チベット密教の代表的曼荼羅



阿闍梨=山口隆雄(1970年)著『チベット密教』講談社

- マトラ (ヒンドゥー教、阿闍梨の図像)。
- マトラ (真言)。
- マトラ (ヒンドゥー教、シヴァ神の性力聖母の化身)。

「秘密集会」聖者流阿闍三十二尊曼荼羅

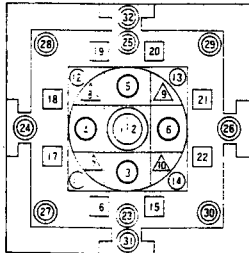


クルクで用いられる。本座ツァンカバを中心にした仏師の黄金(ツァンカバ)。

④

『チベット密教の本』1994. 12. 26
学習研究社 左p.119 上p.115

※(註、イボ密教のこと)。

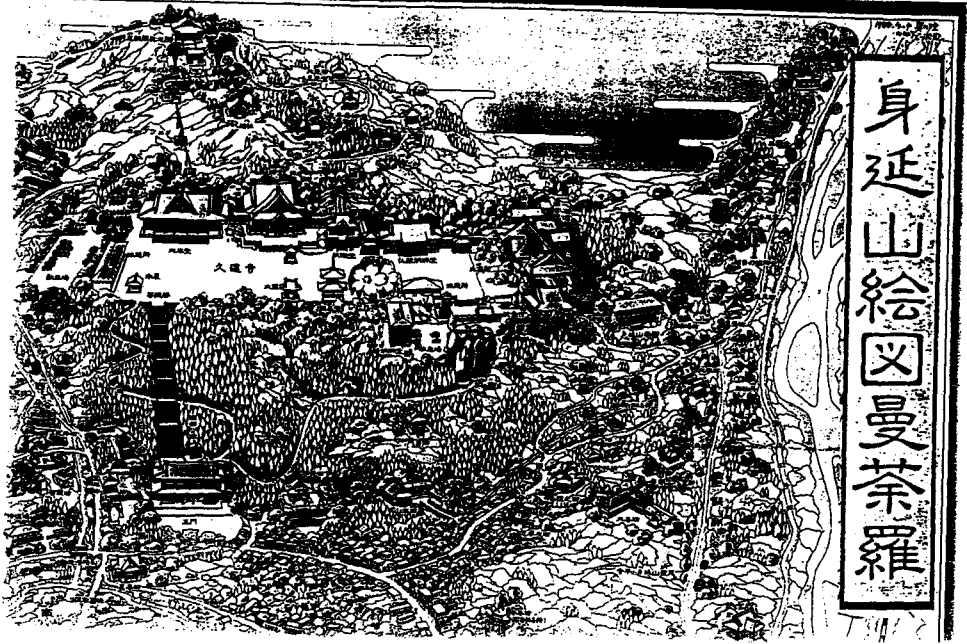


- | | | | | | | |
|-------|--------|-------|-------|--------|------|------|
| 7 | 6 | 5 | 4 | 3 | 2 | 1 |
| 仏眼 | 不空成就如来 | 阿弥陀如来 | 宝幢如来 | 毘盧遮那如来 | 梵金剛女 | 阿闍金剛 |
| 14 | 13 | 12 | 11 | 10 | 9 | 8 |
| 味金剛女 | 香金剛女 | 声金剛女 | 色金剛女 | ターラー | 白衣仏母 | マーマキ |
| 21 | 20 | 19 | 18 | 17 | 16 | 15 |
| 除蓋障菩薩 | 文殊菩薩 | 世自在菩薩 | 虚空藏菩薩 | 金剛手菩薩 | 地藏菩薩 | 弥勒菩薩 |

後期密教の諸ヤントラの中でも最も早く成立し、ゲルク派が最も重視するヤントラである「秘密集会」の曼荼羅。「生起次第の瞑想」で用いられる。

『チベット密教』学問寺ギョメ調査報告書(清風学園発行)の北村太道著「秘密集会曼荼羅の「地盤観」について」より

- | | | | | |
|----------------|--------------|--------------|--------------|--------------|
| 26 | 25 | 24 | 23 | 22 |
| アムリタクワンダリ(蜜茶利) | ヴィイグナントカ | ハヤグリーヴァ(鳥頭) | パドマニタカ | ブラジュニヤンタカ |
| 27 | 26 | 25 | 24 | 23 |
| 不動 | タツキランシャ(愛染) | ニラタンダ | 大力 | 仏頂輪轉王 |
| 32 | 31 | 30 | 29 | 28 |
| スンバララシヤ(降三世) | スンバララシヤ(降三世) | スンバララシヤ(降三世) | スンバララシヤ(降三世) | スンバララシヤ(降三世) |



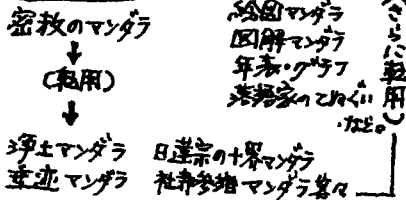
「絵図曼荼羅」、水、ながなが。と水性、木たが。1988.4.4 集の院ご本主、300円。

絵師 田辺知行さん。
録音新書発行。

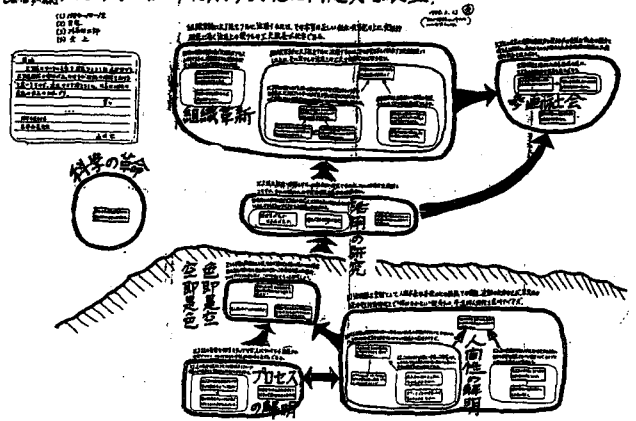
この、身延山、絵図曼荼羅の効果。

これが「マンガラかんた」と、先とのみわく。
マンガ、すなわち、その本質が、スグにわかる。
絵図というものが、とくに、いい。
具体的に、つかえる。
全形を一望のもに示す。「案内」となるわが。
さてと、法華の理（日蓮さんの思想）を、
とんとなく暗示してゆくのです。

曼荼羅の展開



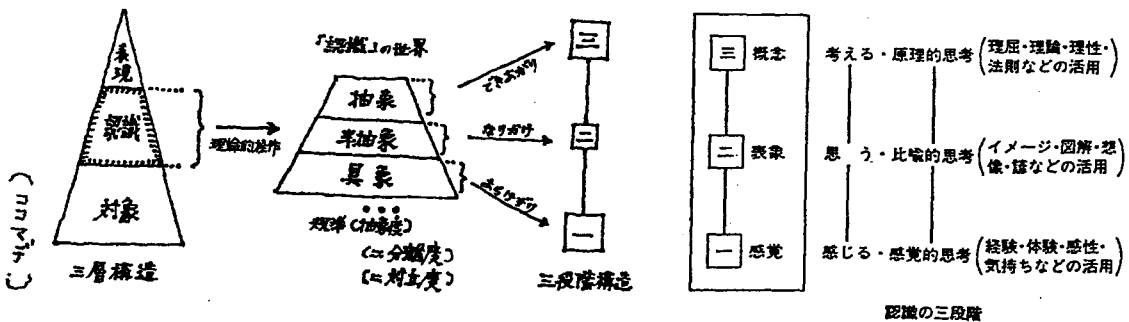
⑨ KJ法の使命に照らして見た問題点と展望



川喜田二郎さんの自作(1984.10.18)。「森の哲学」の結果。
そのコピ-を「曼荼羅」の山田学にお送りした。1985.4.23

- KJ法の面白さの巧みさ。「山」「丘」などのあて、面白し
- 文化、自然界の反映が。● 理論と方法の具体化。

⑩ 認識の三段階連続理論 (いわゆる、流れマンガラ。または、ダイナミックマンガラ。動きを示すがゆえに。) ...→



認識の三段階

